

## 第1部 関係を通してみた発達障碍の理解と対応

### —自閉症を中心に—

大正大教授 小林 隆 児

ご紹介いただきました小林です。今年（平成20年）4月、大正大学に移りまして、この度、田中千穂子先生からこういう場を与えていただき、感激しながらここにやってまいりました。今日は東京女子マラソンをやっているんですね。私はマラソンを見るのも走るのも好きなんですけど、残念ながら今日は見れません（笑）。ちょっと残念ですがやむを得ません。大正大学に移ってから、いくつか事例検討の場に出かける機会があって話を聞いてみて、最近の臨床現場では子どものいろいろな気になる行動、不可解な行動、よくわからない行動を、何でもかんでも発達障碍とってしまう傾向がとても強いことにあらためて気づきました。今日では不可解な行動を示す子どもは何でもかんでも発達障碍に入れられていますね。この流れはこの数年間急速に強まっています。私はそれを見ていてとても恐ろしい傾向だなと思っているんです。それはなぜかといいますと、子どもが起こすいろいろな気になる行動は、私から見るとすべて周りの人との関係の中で起こっていると思うからです。関係の中で起こった子どものいろいろな反応なんですね。それがまるで見えないんですよ。子どもの行動だけを抽出して、その特徴を列記して、その障碍は何だろうかと考えている。そんな現象が起こっているんですね。このような傾向は今や世界中で行われている子どもに対する見方ですね。よくご存じだろうと思いますけど、精神医学の国際診断ではそうなっているんですね。客観的な指標と一応言われている行動特徴を列記して、これだけの特徴がこの子にはある。それを診断基準に当てはめるとAという診断になる。そういうふうな考え方が全国で広がっているんです。とても恐ろしいことだと思いました。

#### 子どもにすぐ自立を求めてしまう

私は先日、ある教育関係の事例検討会に出たんですが、こんな話があったんです。某有名な大学病院の小児科病棟の分校の先生からのこんな相談があったんですね。その分校にいる小学校高学年になるA男は、先天性の内臓奇形のために出生時から今日まで、ずっと入院を余儀なくされていた。今でも経口で栄養を十分にとることは難

しく、点滴で栄養の大部分を補給している状態であると。一方両親も身体にさまざまなハンディを抱えていて、A男は自宅にほとんど帰ったことがない。しかし、A男は院内分校の教室に在籍して、多少なりとも学習の経験は積んでいました。そのような特殊な状況に置かれてきたA男との関わりに、病棟スタッフ全員が苦労していることが、その担任の先生から語られたんですね。この子どもとの関わりで最も苦労していることは、子どもの口から自分の気持ちや考えていることが、直接語られることがないということでした。例えば、入浴の時間になって、入浴したいのかどうかこちらから聞いても、はっきりと返事をしないで遊んでいる。自分から直接言うのも恥ずかしいのではないかと看護師は感じているようで、そのため子どもがはっきりこちらに伝えてくるのを期待して、こちらからは必要以上に近づかないように努めているというわけですね。担任が子どもに個別に聞いてみると、入浴したい気持ちはあるらしいが、どうも看護師には直接話せないのだというんです。日々の看護師の仕事の大変さや忙しさを想像すると、この子のようにはっきりと要求を口にする事なく、ぐずぐずした態度をとられると、多くの看護師はいらいらさせられ、ストレスを感じるのはよく分かる話ではあったんですね。そこで、私が担任に彼の様子を尋ねていきますと、他にもいろいろと気になることが語られました。誰かが話しかけても目を合わせないので、こちらの話を聞いているのかどうかさえはっきりしないと、その反面、学習面では経験不足もあって多少の遅れがあるにもかかわらず、精神的には大人びて早熟な印象を与え、看護師に対して何かと腹が立つようなことをわざとらしくやることが多く、そのためこの子に対して、看護師の多くは、否定的な感じを抱えていることも分かってきました。そこで、こういうお子さんに対して、現場でどういうふうに取り組んでいるのか聞いてみて、私は正直愕然としたんですよ。担任は、この子に対して、いろいろな場面でその都度どのように返答したらよいかを丁寧に具体的に指導するように心がけ、一つ一つ自分の思いを他者に伝えるという体験を積み重ねていくことで自信を持たせられたらいいの

ではないかと、こういうことをおっしゃったんですね。おそらくA男の状態に似たようなケースに対して、今では発達障碍という概念を念頭に置いて、いろいろ議論がされているんじゃないかなと思ったんですね。

このお子さんの話を聞いて、私が思ったのは次のようなことなんですね。この子は自分の気持ちを外に出せないだろう。具体的に言えば、病棟で慌ただしくパタパタと動き回って働いている看護師とか医療職の人たちに、自分の気持ちをストレートに押し出すということはとてもできなくて、ぐずぐず、悶々としているという姿が私には浮かびました。他にもA男のいろんな気になる行動が報告されました。例えば、彼はわざとスタッフが腹の立つようなことをしてしまうというのです。これはattention please!つまり「僕を見てよ」と、周りの人たちに対して注目してほしいというサインを意味しているのですよね。そんなことは子育てをやったことのある人だったらすぐに分かるでしょう。そういう彼に対して言葉で自分の気持ちや要求を伝えられるように指導するところ、障害者自立支援法の影響をとても感じるんですね。子どもに対して自立する力を身につけさせようという、現在の社会の風潮が脈々と流れているように感じたんですよ。そりゃ、最終の目標としてそういうことがあってもいいかもしれないけれど、真っ先にそれを子どもに対して求めるとなると、それはなかるうと私は思ったんですね。A男は生まれて10数年、家庭に帰ったことがないお子さんなんですよ。両親もいろいろなハンディがあったため、いわゆるマザーリングができていないわけでしょう。そういう子どもであれば、アタッチメントの形成段階で、いろいろつらい体験があったらうということとは当然想像しますね。だから私たちがまずやるべきことは、子どもがどんな気持ちなんだろうかということ推し量りながらアプローチして、子どもの警戒心を解き、子どもの気持ちがストレートに出せるようにして、その気持ちを私たちが受けとめていくように関わっていくことでしょう。誰でもそう考えると僕は思ってたんですよ。しかし、今の世の中、ぜんぜんそうはならないみたいですね。僕のそんな甘っちょろい考えではいかんのでしょうかね。私にはそれが大変印象的なことのひとつだったのですね。

### 発達障碍の今日的理解

その他にもひとつ、ある大学の事例検討会での経験をお話します。5歳になるお子さんでした。未熟児で出生して、乳児期にはよく泣き、なかなか寝ない。いつもピリピリして、寝てもすぐに目を覚ます。そんな敏感な子

だったといいます。そのため母親はこの子を育てるのに大変苦勞してきたそうです。親子関係も最初からずっとしっくりこないままで、そんな状態がずっと続いていました。数年後に転居したときも、この子はかなり不安な反応を示していたそうです。排泄の自立は早かったのですが、引越をして間もなくおしっこを漏らすようになったそうです。さまざまな相談機関を渡り歩き、可能な限りの指導や訓練を受けてきたのですが、ある医療機関では、治らないとまで言われたこともあったそうです。これまでの経過から、母親はこの子の問題として、視線回避傾向とかコミュニケーションの苦手さ、手先の不器用さ、集中力の困難、興味の幅が狭いといったことなどを取り上げていました。そこで、このケースの相談を受けた相談員は、母親の悩みを聞いて、次のような方針を立てたというんです。この子の苦手なところをはっきりさせながら地道に取り組んでいきたいと思います。

私はこの事例のレポートを聞きながら、ああ、最近の発達障碍理解というのは、まさにこれなんだなと思ったんですよ。子どもがどんなことが苦手なのか、できないのか、あるいはできるのか、そういうことをみようとする見方が現場で徹底している。そして、それが診断であると。そういう見方でやれば、できないところをどうやって補うか、身につけられるようにするかという発想に当然なるわけですね。でも、私はこのケースを聞いて、一番大事なところは次のようなことだと思ったんですよ。お母さんが子どもの前で、こんなことをおっしゃったというんです。「これまでこの子に対して、自分は何となくしっくりこない違和感のようなものを抱き続けていた。これまでいろいろな治療や訓練を受けてきたが、どれもこれも、この子のある一面しかとらえてもらえず、この子の全体を見てくれていなかった」と。こういうことを母親がおっしゃっているんです。ということは、この子とお母さんとの間にどういう関係が起きているのか、それを私たちは想像しなきゃいけないんですよ。そういう発想が、いまの現場にはあまりにもなさすぎるんですね。

このケースを担当していた院生がこういうことを言い始めたんです。セラピーを始めて間もなくのころの印象的なエピソードとして、こんなことがあったというんです。彼はおもちゃの車を走らせながら、セラピストと表向きは楽しそうに遊んでいた。そんな中で、彼の手に血がついていることにセラピストが気付いて、思わず「どうしたの？」と尋ねたというんです。すると、彼は指摘された血を見ても全く驚きもしないし、平然としていたのだけど、そばで相談員と面接していた母親がそれを聞いてすぐに彼のそばに近づいて彼の手を見るなり、「どう

したの！」と驚くほど大きな声で、まるで責めるような口調で彼に尋ねたそうです。彼はそんな母親の反応に対してその場で突然固まってしまい、そばの椅子の上にストンと座り込んでしまったというんですね。

ここで一体何が起きているのか、ということなんです。お母さんは子どものことですごく心配し、日々一喜一憂しながら生活をしている。そんな中で、お母さんは彼の手についていた血を見た時、お母さんにはどんなことが想像されたり、頭に浮かんだのでしょうか。あまり気持ちのよいことじゃないんでしょうね。明確なものではないのですが、何かお母さんをとて不安にさせるような気持ちが立ち現れてきたんだろうと思ったんですね。そんなお母さんの気持ちの激しい変化がこの子を固まらせたんだろうと思ったんですね。このエピソードを聞いた時、この子は日々お母さんに対して甘えたくても甘えられない、近寄りたくても近寄れないっていうような、非常に揺れ動いている気持ちで生活してるんじゃないかなっていうことを、私は想像したんですね。この親子の関係の底流には、そういった状態がずっとあったのではないかと思ったんですね。

### 関係欲求、甘え

今日は関係障碍という話をいたしますけど、人間はみんなひとりで生きている存在ではないんですね。私たちでもそうですから、いわんや子どもたちもそうです。子どもはひとりで大人になれるわけじゃないんですから、必ず私たちがいろいろ世話を焼きながら、かかわりながら、その中でいろんな体験しながら生きています。その体験がうまくいけば、立派な人間になるかもしれませんが、いろんな人間になっていくわけですね。すべて生まれたときからのそういった経験、人とのつきあいの中の経験がひとりひとりみんな違うんです。その中で、みんな違ったいろいろな個性豊かな人間になっていくわけですよ。私たちはとにかく、人とのかかわりの中でしか人間になっていけない、そういう存在です。今日は子どもを中心とした話になりますけど、子どもはこういうふうに常に人を求めているんですね。具体的に言えば親を、もっと具体的に言えば主たる養育者を。人を求めている気持ちが常にあるんですね。それを私はこれまで「関係欲求」というふうに言ってきました。以前ここ東大におられた土居健郎先生が「甘えの構造」といすばらしい本を出されましたが、土居先生は「甘え」の重要性を力説されているんですね。私は子どもにみられる「関係欲求」ととても大切にしてきたのですが、私の考えていることと同じことだと痛感したんですね。子どもたちはすべ

て、関係、つまり人とのつながりを持ちたい、あるいは自分にもっと構ってもらいたい、注目されたい、甘えたいという気持ちを持っているんですね。しかし、それがさまざまな理由でストレートに出せない。そういう問題がこれまで取り上げた子どもたちみんなとその母親との関係のベースにあるんじゃないかなと思うんですね。

### 発達とは何か

発達障碍という考え方が今日ものすごい勢いで一般化していますけど、その考え方には非常に問題があると私は思っているんです。発達障碍という概念を、みんな気軽に使うんですね。でも、いざ「発達」って何か、あなたは「発達」ということをどのように考えているの？と聞くと、ほとんどの人がきちんと答えられないですよ。私は3年前に会長として小児精神神経学会を開催したんです。で、その時に発達障碍に関してわが国をリードをしている人を3名呼んで、発達をどう考えているのかっていうことで話してもらったんですね。でも残念ながら、私が満足のいく回答は得られなかったんですね。しかし、その時特別講演をさせていただいた鯨岡峻先生（当時京都大学大学院教授）から教えられたんです。

発達障碍という用語は、「発達」という言葉と「障碍」という言葉が一緒に合わさったものです。発達障碍といわれるお子さんはいろいろな行動特徴を示します。それを症状だとか障碍とかいうふうに私たちは気軽につかっていますね。でもそういう行動特徴といわれるものは、すべて生まれてから今日まで歩んできた中で作られたものなのです。間違いなくそうだと思いますよね。では、歩んできた中で作られてきたものというのはどういうことなのでしょう。それは、生きていく過程で人と関わり合う中で身についたもの、つまりは生まれてから今日までの間に対人関係の中で作られてきたということ、こういうことなんだろうと思うんですね。「素質」と「環境」の関係のことを取り上げているのですが、素質の面については、遺伝子や分子レベルで子どもにどんな素質があるかという研究は近年非常にさかんに行われています。しかし、おもしろいことに、遺伝研究、生物学的研究をやっている人たちが、この数年強調していることは何だと思いませんか。いかに「環境」が大事かということがさかんに言われるようになってきているんですよ。当然といえば当然ですけどね。しかし肝心要の臨床をやっている人たちが、あまりにも「環境」をきちんと見ていないんですね。子どもばかり見ていて、そのまわりの環境をみていない、そんな気がするんですね。

症状や障碍といわれているものもこの先どんどん変



わっていくんですね。人との関わりの中で変わっていく可能性を秘めているものだからです。そして最も大事なことは、「発達」というものは、最初の土台作りがとても大切で、それを基盤にしてその上にレンガを1枚積み重ねる、さらに2枚目をその上に積み重ねる、このようにして次々に積み重ねていく。このような歩みを「発達」は構造としてもっている。そのように重層的に積み重ねていって初めて人間らしくなっていくものなんですね。そこで大切になるのが一番土台となるものは何かということです。一番土台として身につけていなくてはならないものが脆弱であれば、いくらそのうえにつみあげたとしても砂上楼阁になってしまいますね。だからこの基礎の脆弱さがあるとすれば、その後のその子どものころの発達をはじめとして他のいろんな面の発達にもすべて悪い影響が及ぶわけですね。そういう現象がすべて発達障害といわれるお子さんたちに見られるんです。

#### アタッチメント、甘え

ではその基盤というのは何か。それは皆さんもよくご存じだろうと思います。この数年アタッチメントattachmentがブームになっていますね。この1年間でアタッチメントに関する本がたくさん出ています。アタッチメントというと私たち日本人にはぴんときませんね。なぜならアタッチattachということばの意味は「くっつく」ということなんですね。でもアタッチメントが起こっている時の感情面に焦点を当てた時、私たちはそこに「甘え」を感じ取ります。つまり、アタッチメントは行動面の用語ですが、「甘え」はその際の感情面の動きを意味しているのです。日本文化の中では「甘え」としてとらえてよいと思いますが、昨今「甘え」ということばは負のイメージでもって語られることが多くて、何かろくなイメージをもたれていませんよね。ですから、親が子どもの甘える姿を見ると、かわいいという感情よりもちゃんとしなさいと言いたくなるような気持ちを持つ人が多いのではないのでしょうか。私が発達障害といわれているお子さんの親子関係を見てつくづく思うのは、「甘え」に対する否定的なイメージを抱いている親がとても多いことなんですね。でも発達障害でないケースの話聞いていても同じようなことがあると思いました。だから「甘え」を負のイメージで捉えるというのは今のわが国の一般的風潮だろうなと思いました。

#### 障害とは何か

つぎに「障害」というのはどういうことなのか考えてみることにしましょう。一般的に考えられているのは、

生まれつき中枢神経系になんらかの基礎となる障害が想定されています。それが基礎障害impairmentといわれるものですね。そして、成長過程で障害あるいは症状disability/disorderが発現し、生涯にわたってなんらかのハンディキャップhandicapが持続するということです。まず基礎となる障害があって、それが成長過程で障害あるいは症状として表に現れるというわけです。そのような障害あるいは症状が一次障害といわれるものです。そして二次障害がハンディキャップhandicapとなります。具体的にいえば、主に青年期に現れるさまざまな行動障害、その他いろいろな行動面の問題を指します。

しかし、ここで一番問題となるのは、出発点となっている基礎障害というものが果たして何を指しているかということなんですね。仮説としてはこれまでにいろいろ指摘されてきましたが、いまだきちんと実証されたものはないんです。あくまで仮説段階でしかないんですね。ですから一次障害disability/disorderは基礎障害の成長過程で発現したものと簡単にいうことができるのかということなんですね。私はそれに対してとても疑問を持っているんですね。診断基準にもなっている一次障害とされているものも基礎障害との関係のみで考えるのではなく、先に述べたように「素質」と「環境」の関係で理解していく必要があると思うのです。私のこれまでの臨床経験に基づけば、障害や症状といわれているものの大半は、生まれてから後の関係の中でできてきたものだと思うのです。すべての行動上の問題も関係の中で生まれてくるんです。関係の視点で理解しないと、その成り立ちは分からないんだと私は思っているんですね。詳しいことは最近出版した「よくわかる自閉症」(法研)という本に書いていますのでそれを読んでください(会場(笑))。今日はこれまであまり取り上げたことのない話をしようと思っています。

#### 「字義通り性」とは何か

子どもたちにみられるいろんな特徴、気になる特徴を関係という視点から見たら何が見えてくるかということ、ある具体例をもとにお話します。一番わかりやすいのは言葉の問題ですね。言葉の問題は自閉症にもっとも特徴的な形で出現しますが、その中でもよく知られているものに「字義通り性」という言語症状があります。分かりやすい例を示しましょう。私は九州に長くいましたけど、そこで教えていただいた話です。私の恩師である村田豊久先生が主治医をやっておられたんですが、北九州に天才少年と呼ばれていた子どもがいたんですね。その子は自閉症、今でいえばアスペルガー障害といえるタ

イブの子どもでした。地元の新報にも載ったことがあったほどで当時有名な子どもでした。まだ小学生でもないのに難しい算数の問題を難なく解くんですね。その子が小学校に入ったんですね。小学校に入ってしばらくして、月曜日の朝に恒例の朝礼があるわけですね。朝礼があって、生徒さんがみんな校庭に並ぶわけですね。そして、壇上で校長先生が「皆さん、おはようございます。元気でしたか」などと話を始めるんですね。するとどこかでべちゃくちゃおしゃべりしている子どもがいたわけですね。校長先生は「誰ですか、おしゃべりしてるのは！」と（おしゃべりしている子どもたちに向かって）注意したわけです。そうしたらおしゃべりしていた子は、はっとしておしゃべりをやめたのでしょうか。でもその時その場にその天才少年がいたんです。みんながシーンとなって静まり返っていた時に、彼が突然「校長先生！」と言ったわけね。（会場(笑)）「誰ですか、おしゃべりしてるのは！」と校長先生が言ったので、それを受けて天才少年はこのように即座に答えたんですね。この時の天才少年の反応が「字義通り性」という特徴をよく示していますね。字面だけみれば、「誰ですか、おしゃべりしているのは」と言ったんですから、確かにおしゃべりしているのは「校長先生」ですから、彼の反応は正解となるわけですが、このとき校長先生が誰に向かってどのような場面でそれを言っているか、その状況を考えれば、こういう答えはあり得ないのですが、その状況が読めないわけですね。それが「字義通り性」というように表現されているわけですね。今風に言えばKY（空気が読めない）ということになるのでしょうか。

これまでずっとこのような「字義通り性」という言葉の問題はとりわけ自閉症の特徴といわれてきました。しかし、なぜそれが生まれるのかという疑問にはいまだ誰もきちんと答えていないんですね。説明できていませんね。実は「字義通り性」という現象は子どもと私たちとの関係の中で生まれてくるものなんですね。つまり私たちが関係する中で必然的に生まれてくる現象なんです。この問題をちょっと考えてみることにしましょう。

これは何ですか？（と聴衆の机を指して皆に問いかける。以下聴衆とのやりとり）。（聴衆のひとりが「つくえ」と答えると、）ああ、いい反応ですね。マイク差し上げなくても「机」って答えてくださった。（つぎに私が机の上に座って）私がこうしたら。こういうふうにしたときには（これは）何でしょうかね。机ではありませんね。今の私にとってこれは「いす」なんですね。その上に座っていますから。皆さんの中には「つくえ」と答えたくない人もいますでしょう。机でも間違いじゃないでしょ。こ

こで私が今何を言いたいのか、みなさん大体わかりましたよね。ある対象、何でもいいんですよ、ある対象が時には「机」になり、時には「いす」になり、時には「いた（板）」になり、時には「つやつやした光り輝くもの」、時には「キャンパス」にもなるかもしれません。落書きをする学生さんにとってそれは机ではなく「キャンパス」といっていいかもしれません。こういうふうのひとつの対象をそれは何だと一義的に決めることはできないのですね、ある対象が1つの意味だけを持っているというわけじゃないということですよ。

皆さんだってそうでしょう。お名前はAさんです。お年は〇〇歳です。いろんな属性があるわけですよ、身長、体重、性格など。みなさんそれぞれに自分の属性があるわけでしょう。物にはすべてさまざまな属性があるんです。でも、私が今、男の人と女の人ほどのくらいかしらと言ったときには、私は男性か女性かっていうところだけを見ているわけでしょう。で、今日は老若男女、お年寄りが何人か、若い人はどのぐらいいるかと見るときには、年齢を言ってるわけでしょう。つまり、私がある方に対して何に注目しているか、おいくつかしらと頭に描いていたら、年齢という属性に着目しているわけですよ。そういうことなんですよ、対象の持つ意味というのは。こういうことは頭ではわかるでしょう。でも現実世界はそれほど単純ではないんです。そこに悲劇が起こるんです。

「風船」というものをちょっと頭に思い浮かべてくださいね、風船といわれるものです。言葉で言うからいけないんですけど、そのような対象を具体的に思い浮かべてくださいね。ある子どもが、風船をもって「ママ…！」と言ったら、この子は風船を膨らませてほしいのでしょうか。だからママはそれを膨らませる。その子が膨らんだ風船を持っていた手を放すと、空気がピューッと、空気が出ていくのを、（頬に当てて）このように味わう。そうかと思うと、ある子どもは、風船を膨らませてもらったのを「見て、見て！」とママに言いながら指で押している。その感触が気持ちがいいんですね、弾力性があるから。ある子どもは膨らませてもらった風船を光にあてて、表面がテカテカと光っているのうっとりしている。同じひとつの風船といわれている対象でも、その子がどういうところに注目しているかによって、その対象の意味はその時その時でみんな違うんですよ。これって当たり前のことですよ。

でも、ある状況に置かれると、人間ってそういう柔軟な対応ができないものなんですよ。例えば、ある自閉症の子が1日に何十個も「風船、風船！」と親に要求する。

他人事ですから風船は安いものだから、まあ、欲しいだけやっていいじゃないのなんて思うけど、そのお母さんにしてみれば、風船もね、こんなに毎日要求されると高いものなんですよ、そうじゃなくても大変ですからね。そういうお母さんの心境を考えると、「ああ、また風船か、また風船か」ということになりますね。いつも風船ばかり、どんな時にも風船ばかり要求するんですからね。そういうふうには風船にとらわれているお母さんが相手すると、その子はますますがむしゃらに要求するんですね。そうなるとうまくいくことに意味があるようになるんですね。そういう関係になるんですね。でも、子どもが風船で自由に遊び始める。そうしますと、間もなくこういうことが起こるんですね。時には、その表面を指で押してみる。するとふにゃふにゃとした感覚を味わう。あるいは、いろんな色とかその違いを面白がったりするなど、その対象にいろんな特徴や性質があるということに子どもが思わず体験的に気づくわけですね、当たり前ですけど。それが子どもの興味や好奇心を高めるわけでしょう。そうすると、「ふんわふんわして気持ちいいね」とか、「おお！テカテカしてきれいだ」「おお！びかびか光ってきれいだね！」「おお！（頬に）ピューッと風が吹いて気持ちがいいね！」とか、付き合っている私たちもついこのようなことばを思わず発したくなりますよね。子どもの世界に入って、つきあって、こちら子どもになってみれば、そういうふうには思わずことばを発しちゃうわけですよ。風船にまつわる多様なイメージをそこで味わう。そういう体験がものすごく大事なわけですね。

子どもはそのような体験を楽しもうとしているのに、親または周りの大人は、いつも常に「風船」「風船」「風船」とずっと言い続けるわけですね。もしそのように大人から言われ続けるとどうなると思います、言われた方は。その風船という言葉が子どもに焼き付くわけですよ。子どもの体験とは全く逆のことがここで大人の側に起こっているんですね。わかりますか。本来は多義的であるはずの対象、いろんな意味を持っているはずの対象に対して、大人の方が「風船」という言葉にとらわれて、「風船、風船、風船！」ということばを子どもに投げ続ける、こういう関係が起こるんですよ。これは（先ほどから自閉症の子どもの特徴として取り上げていた字義通り性の問題からみると）逆転していますでしょ。つまり大人の側こそ「字義通り性」の状態になってしまっているわけです。大人の側がまさに字義にとらわれているんですよ。

いまの話で何となく不可解な顔をされてらっしゃる方が何人かいらしゃったから、もうひとつ具体的にわかり

やすい例で説明しますね。赤ちゃんが泣いているとしましょう。ああ、泣いている、お腹すいたわね。ああ、また泣いている、お腹すいたわね、というように、みなさんはワンパターンでは対応しないでしょう。ああ、おむつがぬれて気持ち悪いのね。ああねむねむね、眠いんだらうから寝ましようというように、泣いている声を微妙に聞き分けて、感じ分けてやっていくわけですよ。でも泣いている、だからオッパイやればいい。そういうふうには短絡的にとらえてしまう親もいるんですね。赤ちゃんが泣いている、お腹がすいたんだ、というような一義的な受け止め方をしているんですね、そのお母さんは。これは字義通りということと同じことですよ。そういうことが実際にある特殊な関係になると起こるし、そういう関係におちいるんですよ。こういう関係のなかで言葉が発せられているんですね。それは子どものころの中に必ず焼き付きますからね。発達障害といわれている子どもたちが、独り言のようにしてつぶやくセリフがたくさんあるでしょ。よく聞いてご覧なさい。身近な人の言ったセリフをつぶやいていることが非常に多いんですよ。次々と頭のなかに具体例がわいてくるものだから、こんなことを言っていたら時間がどんどんたってしまうので、このへんでやめましょう。

### ミラーリング、映し返し

関係を見るということはそういうことなんです。だって、子どもから見ると、最初に出会う対象のもつ意味はわからないんですよ、自分でも。「ええーん」っていても、自分がなぜ泣いてるのかということはわかるわけじゃないでしょう。でもそのときに「おなかすいてるのね、よしよし」とお母さんに言ってもらおう。そのようなことを積み重ねていけば、自分の生理的な変化によって泣くということに対して応えてもらえて満足感が得られるようになっていきます。そういうふうなフィードバックがずっと繰り返されていけば、次第に子どもはまたお母さんにかまってもらおうとして、わざとらしく泣くようになる。あるいは「マンマ」ということばの響きの中に、お腹がすいたという感情が込められたりするようにもなる。そこにこそ生きた言葉っていうのが使われ始めているとっていいわけです。そのようになるためには、今言ったようなこちらのかかわり、もっと具体的に言えば、子どもの気持ちを感じとって、そして投げ返すというミラーリングをしていくということが、子どものころをはぐくむためにはとても大切なんです。今、時代は変わってきましたよね。ミラーリングと私がいま申しましたけど、今や脳科学の世界ではミラー・ニューロンが大



きなトピックスのひとつになっていますね。あと数年したら、きっと劇的に変わると思いますよ、今日話したミラーリングがいかにか子育てにおいて大切かっていうことが力説されるようになっていっていると思います。そのように私は予測してんですけど。数年後に私の予想が当たっていたら面白いですけどね。

### アタッチメントの特徴をみて分かったこと

そこで、私は「関係」が難しいということはどういうことなのか、そのことをきちんと捕らえてみたい、そしてきちんとした臨床をやりたいと思って、この前までいた東海大学でこんなことを始めたんですね（スライドで母子ユニットの紹介をする。実際の映像がうつされる）。その際に枠組みとして使ったのが新奇場面法（strange situation procedure、SSP）というものなんです。これは心理学的な実験手法なんですね。簡単にいうと、ある場所で親子と一緒に過ごしてもらって、3分後にその子どもにとって見知らぬ人、すなわちストレンジャーであるスタッフが入って、その後お母さんに部屋から出ていってもらって、ストレンジャーが子どもの相手するんです。その3分後にお母さんが戻ってくる。そのときにストレンジャーと入れ替わる（ストレンジャーは退出する）。そしてその後、今度はお母さんが部屋から出ていって、子どもを一人きりにする。そして、すぐにお母さんに戻ってもらわなくて、まずは、ストレンジャーが相手をして、最後にお母さんに戻ってもらうという実験なんです。お母さんと一緒にいる時の子どもの反応、お母さんがいなくなった時の反応、お母さんが戻ってきた時の反応、ここに何が、どんなドラマが起こっているのかということを見ようとするための実験で、私はこの実験を通して親子の関係を随分見てきたんですね。

また他のお母さんを紹介します。4歳の子どもその場面をお見せしましょう（実験場面のスライドを見せながら説明）。このお母さんは子どもに一生懸命働きかけています。ほら、〇〇ちゃん、これあげるよ。ほら、これ何？ほら、これおもしろいよ、っていうようにとても一生懸命子どもに言葉かけをしている。それに対して子どもは黙っていて、声ひとつ出さない。そこにストレンジャーが入ってきます。スタッフが入ってきたら、お母さんはすぐストレンジャーにあいさつをし、子どもにおもちゃを指差して、「〇〇ちゃん、先生にどうぞ、どうぞして」って言っています。そして子どもは黙って、すぐにお母さんの言われた通りにストレンジャーにどうぞをしています。お母さんはストレンジャーが入ってきたことに気を遣われたわけですよ。だからすぐ子どもに他人が

入ってきたことを気づかせ、気を遣わせているんですね。すると子どもはお母さんの言われたことをすぐにやっているんですね。でも子どもはお母さんと一緒にいる時は、お母さんがいろいろ働きかけてもほとんど反応せずに黙っています。ただ、時々言われたままオウム返しのように応答しているんですね。

その後、お母さんが部屋から出ていきました。最初、お母さんがこの実験をする前には、私がいてもいなくなっても子どもの反応は変わらないと思いますよとおっしゃっていたんですね。ところがどうして、大変なことがいろいろ起こったんですよ。お母さんがいなくなると急に変わるんです。一人きりになって、ママが行ってしまったということ、子どもはちゃんと見ているんですよ。顔にも寂しさとか心細い緊張が現れているんです。すぐにどんな反応をしたかということ、「ああっ、あああ」っと言って、突然自分の世界に入って一人芝居（のようなこと）を始めたんです。空（くう）に向かって、「ううっ」とか言ってね。そしてこの奇妙な動きをするんです。すべてお母さんがいなくなったからの反応なんですよ。一人芝居、独り言を言っているんです。それから彼は、ブロックの上へよじ登ったんです。壁に並べてあるブロックに。それまで彼は部屋の真ん中にいたんですが、じっとそこにいと落ち着かないんでしょうね。どこか隅っこに行く、とにかく高いところに行ったんです。このような反応ってよく理解できますよね。われわれに今ここで、津波が来た！とか、何かそういう大変なことが起こったとしましょう。皆さん、どうしますか？部屋の真ん中でポーっとなんかしないでしょね。私はこの子どもの行動を見ていて、とてつもない不安な状況に置かれた時、人間はどんな行動をするのかということをお母さんに教わられたんですね。そして驚いたことに、お母さんが出ていって2分半ぐらいたってからですよ。彼は突然思い出したかのようにしてドアのところを走って行ったんです。それまではお母さんを全然追わなかったんです。にもかかわらず、2分半ほどたってからこういう行動を起こしたんです。これって何だと思えますか？ストレンジャーが入ってきて、またお母さんが戻ってきました。そしてまたおさまるんです。

### 関係欲求をめぐるアンビバレンス

この実験をするといろんな反応を認めることができます。この子どもが示した反応の中核には何があるかということをお母さんに考えたんですね。おそらくそれはこういうことだろうと思ったんです。これがあるんだろうということなんです。アンビバレンスという心理状態です（図1）。

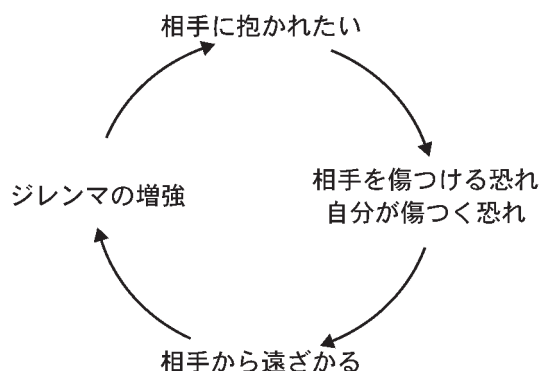


図1 関係欲求をめぐるアンビバレンス

関係欲求、つまりは構ってもらいたいという気持ちがある。甘えたいということですね。でも、いざ親に近づくと、自分が傷つくあるいは相手を傷つけるような不安が起こってしまう。そのために親に近づけない。そして遠ざかっていく。そうすると心細さがいつまでも満たされないし、構ってもらいたいという気持ちも満たされない。そこでジレンマが起こるわけですね。ジレンマが起こるとますます構ってもらいたい欲求が高まりますね。高まるけどいつまでもそれが満たされない。だからこのようにして負の循環、悪循環が起こってしまう。必ずこういうことが起こるんですね。親との関係で子どものころにはこのようなアンビバレンスが必ず起こるんですね。

このアンビバレンスのことを、私は最初にお話した本の中では、子どもが生来的に持っている知覚過敏に基づいてものだというふうにしたんですね。でも本当のところはあまり自信がなかったんです。講演などでよく質問されるんですね。アンビバレンスは何が原因で起こるのかと必ずといっていいほど聞かれるんですね。今のところ自閉症の原因論は器質論が盛んですね。そんな背景があるので、生来的な知覚過敏がそのもとにあるというように述べておくのが無難ではないかという思いが正直なところあったんです。でもここでいう原因など証明しようがないですね。それでそういうふうにしたんですけれどね。最近「よくわかる自閉症」の書評を小倉清先生が書いてくださいますね。それは違うと思うと率直に書いてくださったんですね。つまり、子どもは生まれてしばらくは母親に全面的に依存しないと生きていけない。しかし、母親にはいろいろな事情があって無条件に子どもを全面的に受け止めることは容易なことではない。だから必然的に子どもは母親の反応に対して敏感にならざるをえない。そうしないと生きていけないわけ

すから。そのような条件こそが結果的に子どもを敏感にさせるものではないかと指摘してくださったんですね。私も今ではそう思っています。そのような親子の様子をSSPでは頻繁に目にするからです。

子どもというのは、生まれてからしばらくの間、全面的に身近な人に頼らないと生きていけない非常に無力な存在です。ですから、私たちは全面的に彼らが無条件に受けとめて育てなければ育たない。子どもにはひとりでは心細い、だから甘えたいという気持ちがあるものすごい強いわけですね。でも、私たちには無条件に子どもを受け止めることがいつでもできるかというところではない。さまざまな事情というものがあるわけですね。現実には何かしらの事情もあるかも知れません。でももっと大きい意味をもつのは、その親自身の生まれてからこの方、とりわけ小さいころに甘えというか関係欲求がどういうふうに満たされたか、あるいは満たされなかったか、それにまつわるどんな経験をしたのかっていうことなんですね。そのことが子育ての中で露わに出てくるんですね。悲しいことですが、だから私たちは無条件に子どもたちの心細い気持ちを受けとめられないことが多々あるわけですね。発達障害といわれる子どもたちの場合には、それが非常に強いんです。親子の間に悪循環が生まれると、ますますこういう思いが強くなる。自分のそういう気持ちを受け入れてもらえるかどうか、子どもはいつも親の顔をうかがっている。親をモニターしながら、とても気を遣いながら行動しているんですよ。そういうことが母子臨床をやっているものすごく見えてきたんですね。

もし私が一般の病院の診察で、「はい、いらっしゃい」。いや、いらっしゃいとは言いませんね。(会場(笑))「お子さんのどんなことがご心配ですか」というような型どおりの診察をして子どもばかり見て、お母さんの話を聞いていたら、発達障害だ、自閉症だという診断をしまっていたでしょうね。そんな診察ばかりしていたら、親子のこうした問題はちっともわからなかったと思いますね。東海大学で、新しい学部ができて好きなことをさせてもらっていたものだから、こういう母子ユニットをつくることができました。おそらく東大にもこんなものはないでしょう。

この実験をしてきていろんなことがわかったんですね。恐ろしいことなんです。だってお母さんでさえ、この子、私がいなくても何の反応もしないと思いますよ。おっしゃられたんですから。でも、そうじゃないんです。それで、このビデオをお母さんにその場で見せました。そうしたら、びっくりされていましたよ。



私がいなくてこんなに心細い反応するのかしらと、驚かされたんです。これは親にとっては、いい意味でショックでしょ。ああ、うなずいてくださった。前から2番目の方。こういう反応があるから話す勇気がわいてくるんですね。(会場 (笑)) これまで私はなかなか大変だったんですよ。5年とか10年前まで、私は周りから地獄のようなひどい評価を受けてきたんですから。小林の話は母原病の再来だね。随分前に東大に関係した人にそう言われたんですけどね。ああ、いらんことを言ってしまった。(会場 (笑))

子どもには、こういう気持ちがいっぱいあるんですよ。当然のことです。ですから、子どものいろんな行動は、すべてその子どもの今の気持ちの表れなんです。そういうふうに見ていただくと、子どものことがものすごくわかりやすくなりますよ。でもそれは大変なことなんです。なぜかといいますと、そういうことを感じられるか、感じとれないかというのは、己の身ひとつにかかっていますから。己の身ひとつで勝負しなくてはいけない世界ですよ。チェックシートで、視線が合わない○、(会場 (笑))。10項目のうち6つ○だからこれでいいんだ、っていうような、そんなことばかりをやっていたらあきません。臨床の力つきません。本当にそう思いますよ。つまり、己自身の全存在を駆使していない。子どもは私たちの生きている環境の中で活動しているんですよ。私たちが子どもに直接会うでしょう、するとそこで必ず私たちのこころも動きますでしょう。でも多くの場合、医者はそこではまるで無色透明な存在であるかのように思っていて、この子は自閉症だ、発達障害だなどと、行動チェックでいろんなことがわかったようなことを言っているんです。でも恐ろしいことに今では親もそんなふうには子どもを見るようになってきているんですよ、これほど悲劇的なことはないですよ。親に向ける気持ちの表れがいろんな行動に出ているのに、それが自分との関係の中で出ているとは気づけない悲しさ。人間ってそういうものなんですよ。岡目八目って言うでしょう。私には見えても当事者には見えない。もちろん、その逆もあるんです。私自身が関わっていて子どもがこうなっちゃった。もう大変になってしまう。そんな時、関わっている私には見えなくても他の先生だったら見えたりするんですよ。そういうことは大いにあると思いますね。臨床とはそういうものだと思いますよ。だからこのような仕事で飯を食っていきけるんですね。

## 親子の関係の修復

ではどういふふうにしてここから親子の関係を修復し

ていくかという話をこれからしようと思います。今からおもしろい話ですから、しっかり眼を開いて。(会場 (笑)) ちょっと私も水を飲んで、気合いを入れ直して。話のエッセンスはレジュメの3枚目に書いてあります(資料)。それを黙読してください。はい、お読みになったですね。(会場 (笑)) 今度も具体的にお話しますね。

子どもが自分に反応してくれない。すると、こちらは無視されているような感じを持ちやすいですね。そういう体験は誰にとってもいい気持ちはしません。焦りますね。周りからもいろいろ言われますし。ものすごいプレッシャーですよ。そのプレッシャーからくる焦りというのは、本人はそう思っていないけれど、ストレートに生々しい形で出てしまうんですね。

ある坊やを例に出します。D君としましょう。ものすごい心細い状態です。心細い状態の時に、「Dちゃん、ほら、これがあるよ、これ、ほら…」などとお母さんからいわれます。それは言葉を乱射銃で発しているようなのです。機関銃のようにものすごい勢いで子どもに言葉が押し寄せてくるわけですよ。言葉の洪水といってもいいでしょう。まさにそうでしょう。だから、こういうときには子どもは一切声を出しません。声を出さないというのは、実は声を出そうと思っても声が出ないといった方が実態に近いと思うんですけど。なぜ声が出ないかわかりますよね。こんな時には声は出しませんよ。だって声を出したら、すぐに自分がどこにいるか気づかれますから、襲われてしまいます。だからびくびくしているときには、じっと自分の存在が相手に気づかれないようにおとなしくしています。まわりに対してとても警戒心の強い状態のときは、人間はみんな誰しもこういうふうになります。そしてどうしているかということ、目の動きでは物事を正視しないんですね。正視したら、何や、あんたおれに因縁つける気か、なって言われるでしょう。だから電車の中でも皆さんそうでしょ。変な人がいても、チラチラ、いやな人がいるわと思いつつ、その人を正視するようなことはせず、斜めからちらちらとしか見ることはしませんね。私は知りませんよという顔をしないと怖いんです。何ですかあの方は、なんて正面きって言ったら、何や、あんた文句あるか、なんて言われちゃうでしょう。都心の電車に乗ると、そんな人ばかりでしょ (笑)。我々でもそうでしょ。一緒ですよ。

生まれてからずっとそういう状態で育つと、常にキョロキョロ周りの様子伺うんですよ。そうしたらどうなると思いますか?我々は正視したときに一番よくものが見えるように自然に、網膜の細胞は変化を遂げていくんですね。そのように変容を遂げていくんです。これは生物

学的に実証されています。しかし、小さいときからそういうふうにおびえて常に周辺視野を使っているとどうなるかということですね。自閉症のお子さんで周辺視野を使っていることはよく観察しますね。彼らには独特な目の使い方がありとよく言われるでしょう。自閉的視行動といわれているものです。だから彼らの周辺視野はすごく発達しているというか、よく見えるようになっているんです。日頃からずっとそこを使っているからそうなるんです。だから、いつも使っていれば、そこが当然発達してきます。成熟し機能が発達します。使わなければ衰えるんです。自閉症の人のいろんな特徴というのを、成長過程でのいろんなゆがみ、それがいろんな形になって表れているというふうに見ていけば、非常によくわかるんです。

### アンビバレンスの悪循環を断ち切る

では、いかにしてこのアンビバレンスの悪循環を断ち切るかということなんです。そのためにはまずお母さんに、言葉かけをちょっと抑えてみましょうか。とりあえずお子さんの様子をじっくりみてみましょう。お母さんから何か働きかけるということはされなくてもいいんで、お子さんがどういうことをしようとしているか、どんな気持ちで今動いているかとか、とにかくお子さんの様子をじっくり見ながら、それに応じるように心がけていきましょうというようなことを助言するんです。お母さんたちはものすごく一生懸命されてらっしゃいますからね。あるお母さんには、ちょっと肩の力抜いて手抜きをしましょうねとか、人によっていろんな言い方をしますが、そのお母さんは手抜きをしていいんだって言われて、すごく楽になってほっとしたとか言っていました。

それがうまくいくとすぐに効果が出てくるんです。かなり変わってくるんです。子どもが自分を表に出すようになってきます。そういう雰囲気生まれると親御さんもゆったりしてきますし、そのような守られている場に子どもがいることで、子ども自身もその空気を感じ取って伸び伸びしてきて、自分を出しやすくなるというようになるわけですね。最初のころは、親御さんの方が前景に出て、お子さんの方は後景に退いちゃっていたんです。そうしたら相対的に子どもは前景に出てくるということが起こってくる。これはすごく大事なことです。そうしたら、子どもの生きざまがすごくわかりやすく感じとれるようになるわけですね。

そうすると、いろんな反応が起こってくるんです。でもそれからが大変なんです。それで万々歳にはならないんです。ここまですごくよくと多くの子どもの自己

主張がどんどん強くなるんです。そうするとつぎに親に不安が起こるんですね。こんなに自己主張が強くなると、このまま行けば、どんどんひどくなって手がつけられなくなる、そんな状態になりはしないかと不安になるんです。だから早くしつけなくてはというような気持ちが強まってくるんです。やっと子どもが自分を出し始めてきたと私は思っているのにね、親御さんは何かしつけなくてはいけないんじゃないでしょうかと言いはじめ。これ、冗談じゃないんですよ。本当の話です。そういう経験をいくらもしてきたもんですから・・・。お母さんからみると、それまでのD君からすれば、とてつもない強い自己主張なわけですよ。今までのお母さんが持っていたD君のイメージとしたら豹変したようなものですよ。

これからが大事なところなんです。何かと申しますとね。この親御さんは、口ではすごく子どもが自分に甘えてきてくれたらうれしい、甘えてほしい、甘えてほしいって強く思っていて、日記にいつも書いてらっしゃったんです。甘えてほしい、自分を必要としてほしい、ということ。それだけ強い思いをもってらっしゃる方でも実際にこのような変化が子どもに起こると戸惑ってしまうんです。子どもが実際に甘えてくるんだけど、親が期待するような甘え方で自分を出してくれないということですかね。最初から親が期待するような甘えなんて、出ないんですよ。今までたまっていたものが出始めたときには、穏やかに「ママっ」なんて言ってくれるわけじゃないでしょう。たまっていたわけですから。ふたを開けたら、大変なことで、「ぎゃー」ってなもんでしょう。びっくりしてしまいます。すごいんですよ。怖いんじゃないでしょうか。でもその後がとてつもなくドラマチックなんです。子どもはだんだん自己主張強くなって、いやっ、だめって言うようになったんです。子どもが「ノー」と言えるようになったわけですね。都知事の石原慎太郎じゃないけれど、「ノー」が言えるということは大事なことです。会場（笑）スピッツという学者はその重要性を強調していますよ。「ノー」って言い始めるわけですよ。「いや！」ってね。この時に私たちはそれにどう対応するかが問われるんです。このお母さん場合には、自分が突き放されて見捨てられるような不安を起したんです。そうすると、どういうことが起こったかといいますとね。子どものご機嫌をとるんです。子どもに過剰につき合い始めるんです。子どもが何かしたら「ああ、できたね、Dちゃん」と過剰に褒めまくるんです。そう言われると子どもはますます褒められたことをするようになるわけですね、当然のこ

とです。なぜこの子がこうしているかという、私はその場につき合ってみて、この子は今自分がなくなる不安を起こしているんだと思ったんですよ。子どもが親に逆にしょっちゅうまとわりつかれてご覧なさい。常にその人の影響の元で自分が何かをやっている。それってたまらないでしょ。自分で思うようにできなくなる不安を起こすんですね、子どもがね。

でも、その時の親は、ああ、そうなんだ、この子は今自分を何かしっかり確かめて、確認して、何か新しい世界を少しずつ経験しているんだというように、ゆとりを持って見れなかったんですね、このお母さんは。子どもに見捨てられるような気持ちになった。私はそれを見たときに、お母さんの子ども時代を想像したんですよ。すると、こんな場面が浮かび上がってきたんです。自分の子ども時代がよみがえっているのではないかとね。お母さんは子どものときすぐお利口さんで、自分の母親の期待に応えられるように、応えるように頑張ってきたのではないかと。そういう人生を送ってきた人ではないかと思ったんですね。そういう子どもの時の体験を想像したんです。そこで私はそのように感じたことをお話したんです。子ども時代に、自分の母親に褒めてもらえるように、褒めてもらえるように、頑張ってきたのかなという感じでね。今、目の前で起こっていることを私との間で取り上げるわけです。そうするとすぐに気づかれるんですよ。子ども時代の自分というのがそこですぐによみがえるわけですね。このような臨床をやっていると、そのようなことがよく起こるんですね。

別のケースをお話しますね。いま頭に浮かんだものですから。Cちゃんとしましょう。初診の時でした。Cちゃんは部屋の中を活発に動き回っているんですが、どうも母親の存在をいつも意識しているんですね。この子は甘えたいのに、お母さんに近寄れないんだなと見ていて強く感じたんですね。何度か会っていくうちに、ある時期から母親の方に甘え始めたわけですよ。いい感じになったなと私は思っていたんですが、そしたらある時、母親が座っていたところに、母親の両膝の上に頭から突っ込んできたんですね、奇妙な甘え方ですけどね。その時そのお母さんは突然つぎのようなことをしたですよ。「ほら、あそこに、あんなおもちゃがあるよ。あれやってみたら。パカパカお馬があるよ。あれ乗ってみたら？」って子どもの気をそらそうとしたんですね。この時お母さんは思わずそうされたんだろうと思うんですね。なぜ、そういうふうにお母さんが反応されたと思いますか。本当なら「よし、よし、よし」ってすればいいと思うんだけど

ね。できないんですよ。まさにそこに自分の子ども時代が映し出されているんですね。その時にこのお母さんが話されたことはといいますと、詳しいことは話せませんが、とにかく自分の親の期待に応えるため一生懸命頑張ってきた。親に甘えるなんてことは、とてもじゃないけど、これっぽっちも考えられなかった・・・そんな感じのことをおっしゃったんですね。ですから、このお母さんの身体は甘えるということに関しては負の体験もっている。だから、子どもが甘えると思わず、何か、ほら、何ちゃん、ほら、やっごらん、ってなってしまう。子どもの気持ちを受け止めて、しっとりとした雰囲気互いが浸るなんてことはこの時のお母さんの身体は受けつけなかったんですね。

### 行動の背後にあるころの動き

今お話したようなことは臨床場面でとても多いんですね。これは他人事じゃないですよ。私たち自身もそのようなことを知らず知らずのうちにやっていることが少なくないように思うんですね。都内のある保育所での話ですけれどね。私から見ると明らかに子どもが甘えたような反応を示しているのに、それに対して負のイメージを持って対応されているんですね。そういうところが少なくないような気がするんですね。今の世の中は子どもに対して甘えたらいいかというようなことをいろんな形で伝えているような気がして仕方がないんですね。先ほど例に出したお母さんは私との話の中で自分の過去を思い起こして今の自分との関係について気づき、生活環境もいろいろといい方に変わっていくことによって、そこではじめてお母さんはゆったりすることができたんですね。そうしたら子どもは目立って甘え始めたんですね。べたべたとまとわりつくようにして。まるで濃厚なラブシーンを見ているようでした。その親子にとってこんな変化は初めてだったんです。親も自分の過去や経験に対して、距離を持って捉え直すことができ、それから解放されて、そこで初めて子どももお母さんに向かって自分を出すことができたんですね。

### 大人の発達障害、行動障害

では大人の発達障害の場合はどうなのでしょう。先ほどから述べてきたような関係の問題がずっと続き、その悪循環が雪だるま式に肥大して、とんでもない状態になった人たちが驚くほどたくさんいるんですね。そういう人たちが精神科病棟や入所施設にいるんですね。一番新しい本で「自閉症とこころの臨床」(小林隆児・原田理歩著、岩崎学術出版社)というのがあります。原田理歩



さんというすばらしい臨床実践家がいるんですけど、彼女がそういった大変な人たちに対してどういうところに気を配りながら取り組んでいったか、その中でどのようにして彼らのこころが見えてきたかということが書かれています。彼女が書いているひとつの印象的なエピソードをここで紹介しましょう。

ものすごく激しい行動障害を示していた人ですが、油断すると一瞬のうちにばーんと頭突きをします。職員は傷だらけになってしまうほどで、そんなすさまじい行動障害を呈していた人がいます。もう30歳ぐらいだったかと思いますが、その人と関わっていた時の原田さんのエピソードの中で、次のようなものがありました。紹介します。

その頃のエピソードでこんなことがありました。  
ある土曜日の朝、朝食の時間でした。

Bさんは食堂に行っており、私は居住棟の方にいました。突然「ウギャァ～！ウオッ、ウオッ！」と、食堂と居住棟の間をつなぐ廊下付近から、聞き慣れない大きな声がしました。

何事かと私が驚いて声のした方へ行こうとすると、突然、ものすごいスピードと勢いで、大ジャンプしながらBさんが現れました。その額には脂汗をかき、必死な様子で私の目の前までやってきて左手で私の手をぎゅっと掴み、右手を挙げて「マッ！マッ！」と何か訴えてきます。私は訳がわからず、「どうしたの？」と聞いた瞬間、Bさんの目がキッと鋭く光り、あっ、と思った瞬間には、ゴンッ！と思いつき鈍い音を立てて、私は眉間に頭突きをされていました。私はあまりの痛さに目も開けられず、しゃがみ込んでしまいました。しかしBさんは、しゃがみ込む私の背中の背骨が出ているところへ、さらにもう一発、ドンッ！と頭突きをしてくれました。

「これはただごとではない…」と、痛いけれどもどうもまわっているわけにもいかず、でも立ち上がることもできずに困り果てているところへ、騒ぎを聞きつけた男性職員が駆けつけ、間に入ってくれました。食堂にいた職員も騒ぎを聞きつけて来てくれたので食事の様子を尋ねたのですが、特に混乱する場面はなかったとのことでした。

しかし、あの声といい、この他害といい、何か理由があるはず…と、ふとBさんを見ると、なにやら歩き方がおかしいのです。そこで嫌がるBさんをなんとか男性職員に抱きかかえてもらいながら足を調べてみると、足首に傷があり赤く腫れ上がっていました。「そうか。けがしちゃったね。痛かったね。」と私が言うと、一瞬Bさんと

私の目が合いました。その鋭い視線にどきりとしました。そして次の瞬間、後ろからBさんを抱きかかえていた職員のおかげに、後頭部で思い切り頭突きをしました。

どうやらBさんは、食堂から居住棟へ戻ってくる間に、どこかで足をぶつけ、けがをしてしまったようでした。その声からしてもそれはそれは痛かったのだと思います。その頃のBさんは、発する言葉は「マッ」しかなく、笑ったかと思うと頭突きするなど、快と不快の区別が非常にあいまいでわかりにくく、喜怒哀楽の感情も表情と合致していないと感ぜられることが多々ありました。大きな声を出すことも珍しく、いつも小さな声でもごもごとか何かを言っていました。それでもこの時のBさんはなんとか私に伝えようとしてくれたのですが、正直、あのすごい勢いと、常日頃受けている他害の恐怖から、何よりも先に私の体が反応してしまいました。Bさんに手を掴まれた瞬間、無意識に私の体が緊張し、それが瞬時にBさんへと伝わり、他害に至ったのだと思います。それはまるで私の強い不安をそのままBさんが自分の不安のように感じてしまったかのような感じでした。そして何より、「マッ！」と右手を挙げるだけの彼とのコミュニケーションの難しさに、ひどく打ちのめされた気がしました。傷の手当てにしる言葉にしる、人からの接近や働きかけを非常に侵襲的に感じてしまい、なかなか安心できる関係を持ってないBさん。私の眉間は腫れ上がり、鼻も少し曲がってしまったのですが、この体験は、これ以後Bさんとの様に接したらよいのかを深く考えるきっかけとなりました。(小林・原田, 2008, pp.138-140)

原田さんは、とても難しい行動障害の人の一挙手一投足、その動きの中に、彼らのこころがどのように反映しているのかということ、ものすごい鋭く読みとる才能にたけた人ではあるんです。だけれどもそれは天才肌の人のやっていることだということ、私たちには及びもつかないというのではないんです。そうではなくて、いかに日頃から、子どもたちのこころの動きに注意や関心を注いでいるか、ということが極めて大切だと彼女は教えてくれているような気がするんですね。やれ、自傷だ。やれ、他害だ、行動障害だ、じゃ、お薬だ、あるいはやれ行動療法だとか。そういうふうに行動で片づけてしまうんじゃなくて、行動の背後に動いているこころの動き、それが何なのか、それを私たちが気づくのは、私たち自身の、この自分自身の存在を通してしか、感じ取れない。いやそのように否定的にとるのではなく、私たちの存在を通して感じ取ることができるのだということなんですよ。他人の力を借りることなく、自分自身の存在こそが

武器なんです。そうしていくと次のような変化が起ってくるんですね。また引用します。

このように、ささやかな毎日の繰り返しの中で、行きつ戻りつしながら、まずは私達関わる側が言葉でのコミュニケーションにはこだわらず、Bさんの動きや目の様子、大きさ、色、形、目に表れる意図や感情などを、その場に応じて感じとり察するようところがけました。

またBさんに接するときは、Bさんの半歩後ろから彼に付いて歩くようにしました。何か衝動的に動いた時でも、まずはそれを制止するのではなく、何をしたいか、何をしたいのかを見守るよう心がけました。全てを「マッ」だけで表現するので、その言葉一つに、様々な意味が込められています。その時々状況によって、「マッ」の意味は限りなく変化するため、「マッ」の意味を探るといよりは、その時々Bさんの思いを感じとる、という関わりが必要でした。そのためには、Bさんのことを丁寧に見守っていくことがどうしても必要でした。

Bさんのことをよく見ていると、園での生活の中で、見通しのつかない場面や待つ状況などが大変苦手なことや、周囲の音や動きに敏感に反応し、様々な刺激に翻弄されるかのように落ち着かなくなっていくことが多いこともわかってきました。そこで職員間でも何度も話し合い、Bさんを誘う場合には、できるだけ短い言葉で、わかりやすく伝えること、騒がしい場面はとて苦手なようなので、可能な限り、皆とは時間をずらして入浴や食事などを始めること、洗濯機を他の場所へと移し、Bさんの衣類は職員で預かり必要に応じて用意していくなど、様々な生活環境を整えつつ関わっていくことにしました。そしてBさんが落ち着けない時には、何よりもまずは職員自身が落ち着いて動きを緩めて接してみることも心掛けていくこととなりました。

こんなささやかなことを積み重ねることで、少しずつBさんとの過ごし方が変わっていきました。Bさんのことが少しずつわかってきたことで私自身の不安も少しずつ減り、よい時間が持てるようになってくると他害に対する不安も影を潜めていきました。それと同時にBさんからニコニコと近づいてくるが増え、着替えの回数も減っていき、Bさん自身の動きも少しずつ緩やかになっていました。

その頃、私がBさんと過ごす日々の中で、とても大切な出来事がありました。

ある日のことでした。Bさんがタターッと廊下を走ってきて、パッと私の前に立ち、「マン！」と言いながら自

分の腰のあたりを2回、ポンポンと叩くのです。初めて見るそぶりに何だろう……と考えると、今度は風呂場を指し「マン！」と言います。「えっ!?!お風呂は夕方だね。」と答えると、困った様な、恥ずかしそうな変な顔をして動かず、強い視線で私をじっと見つめ続けるのです。私は徐々に焦り始めるのですが、同時にBさんの視線も段々と険しくなっています。とその時、何やら匂いがしました。はっとしてBさんをよく見るとズボンが少し汚れています。指も汚れていました。走ってきたのはトイレの方からです。「そっか。トイレに行って来てよごれちゃったんだね。上手に教えてくれたね。よーし、シャワーしよう！」そう言うと、途端にものすごい笑顔になり飛び跳ねました。(小林・原田, 2008, pp.142-143)

外から見ると、とんでもない行動障碍で、何だか人間じゃないんじゃないかと思うような人ですよ、このBさんっていう人はね。でもね、一人一人みんな生きているんですね。そしていろいろなことを感じながら生きているんですね。そして、自分のことをわかってもらいたいと思っているんですよ。でも、それに対してあまりにも私たちは、彼らのこちらに向けている気持ちに対して、発達障碍とか、行動障碍というように、そういうラベルを貼ってこちらからその関係を結果的に断ち切っているんですね。断ち切っているのは私たちの方なんです。その大きな要因のひとつには、彼らの方がこちらにわかるようにしっかりと主張してくれないからなんですけど。でもそんなことを言い訳にしたら臨床に従事する人間としては失格でしょうね。こういうことに気づくことができるようになると、一臨床家としてはものすごい充足感を味わうことになるでしょうね。そうすると両者の関係はどんどん変わっていくんだろうと思うのです。

子どもが小さい頃、1歳、2歳、3歳、そういう時だったら、いとも簡単にと言っては悪いけれども、ものすごく劇的に変わっていくんです。このBさんの変化は数年の期間を要したんですよ。ということは、数年のみならず、5年、あるいは10年先にも可能性はあるんだということもいえるんですね。

私たちは彼らのところを理解する際に、あまりにも常識的な考え方に縛られてしまっているのではないかと思うんですね。最悪だと思うのは、私たちが症状だとか障碍だとかそういうふうなラベルを貼ってしまい、自分との関係の中でそういう行動や症状を見ていないことなんです。するとどうということになっていくかということ、さきの言葉の例でお話したように、本来ですと彼らのこの育ちを支えていかなきゃいけない私たちが、とん

でもない働きかけを結果的にやってしまうことが現実にも簡単に起こってしまうんですね。そんなことは数えきれないほどあるんですよ。そういう流れが今急速に強まってきているということを、私はとても憂慮しているんですね。

今日、後半取り上げた本を小倉清先生にお送りしたんですね。そしたらこういう返事をいただいたんです。それを紹介させていただいて今日の話をとじたいと思います。

.....

発達障害の人々への「こころの臨床」について、臨床の場でここまで具体的に細かく述べられた初めてのの本ではないでしょうか。

しかし、この治療にかかわられた人々が示しているresilience (回復力) とでもいうべきものには感服させられます。こんなに長いスパンであきらめずじっくりと取り組もうという生き方はどこからくるものかと思いません。考え方とか、臨床的態度というよりは生き方というべきでしょう。

しかし、私たち精神科の臨床にたずさわる者は常にこの生き方が求められているし、また自らも求めねばならないでしょう。それは果たして訓練によって作られるものかどうか、頭で分かってゆくものなのかどうか、と思えます。

障害の種類を問わず、どなたに対してもその支援は結局そういうことに尽きるものでしょう。この本はそのことを明らかにしているものともいえると思えました。

.....

私は、この原田さんという人にもものすごくいろんなことを教わったんですね。それで確信したんですよ。小さい子どもたちとの臨床と全く一緒だ。ただし、この大変さは尋常なものではないということがいえるんだと。彼女が自分の身を挺して取り組み、その経験を通して論じてくれているんですね。そこで初めて私たちは彼女の経験から学ぶことができているという気がするんですね。ですから、私たちも発達障害といわれる人たちとの臨床現場で確かに一時的にはいろいろ大変なこともあるんだけれども、その大変さの中で、ものすごい充足感、感動、

生きているという実感、そういうものを少しでも感じ取ることができたらいいなと思うんですね。毎日の臨床現場で9割は大変なことがあっても、1割、いやほんの一瞬でもいいから子どものこころと触れ合うことができたと感じとることができたならば、お互いの心が通じあったという喜びや感動があれば、私たちも親も彼らとともにやっていけるのではないかと思うんですね。おそらく、人間にとってそういうことは生きていく上で一番の喜びになるんだらうなっていう気がするんですよ。

今日、発達障害、とりわけ関係をとりにくい子どもたちが問題とされていますけど、それを子ども自身の特性として片づけたらだめなんですよ。それでは子どもを育てる私たちの責任を果たしたことにはならないと思えますね。発達障害臨床というのは子育てそのものなんです。子どものこころを育てるという営みは、私たちが大人としてもっとも果たさなくちゃいけない役目ですよ。発達障害の臨床はそのことの難しさとおもしろさ、喜びというものを教えてくれるような気がするんですよ。ということで今日の話を終りたいと思います。ご静聴ありがとうございました。(会場、大拍手)

## 参考文献

- 第93回学会特集 (2005). シンポジウム「子どものこころの臨床における発達について再考する」. 小児の精神と神経, 45, 313-330.
- 小林隆児 (2008). よくわかる自閉症—「関係発達」からのアプローチ—. 法研.
- 小林隆児 (2008). 自閉症の施設職員との出会いで学んだこと. 学術通信90号, 29; 6-9.
- 小林隆児・原田理歩 (2008). 自閉症とこころの臨床—「行動」の障害から「行動」による表現へ—. 岩崎学術出版社.
- 鯨岡 峻 (2005). こころの臨床における質的アプローチと発達観. 小児の精神と神経, 45, 231-241.
- 鯨岡 峻 (2005). 発達障害の概念とその支援のあり方を考える. 教育と医学, 53, 1128-1136.
- 小倉 清 (2008). 本との対話 小林隆児著『よくわかる自閉症』. こころの科学, 140, 126.



## 関係障害という視点からみた発達障害

小林隆児（大正大学人間学部臨床心理学科）

### 1. はじめに

今春、現勤務先に転職してから、都内で事例相談あるいは事例検討の場をこれまで以上に経験するようになった。そこで痛感してきたことは、子どもに深く関わる家族のみならず、保育や教育あるいは保健、医療などあらゆる場で理解困難な子どもを「発達障害」という目で見られる傾向が加速度的に強まっているということであった。しかし、残念なことにそこでは子どもたちのこころのありように焦点を当たられることはごく稀で、多くの場合、子どもの能力面にどのような障害があるかという一点に人々の関心が集まっている。その結果、親子はこうした「発達障害」ブームに翻弄されているといってもよいのではないか。

ここでは、肝心要の「発達障害」とは何かということについてあまり深く考えられることなく、あまりにも安易に用いられているのではないかと痛感させられる。

ここでは、はじめに「発達障害」とは何かを改めて考えてみることにしよう。ついで、子どものこころの発達あるいはその問題について、なぜ「関係」を通して捉えることが大切なのかを考えてみる。

そして、これまで考えられてきた「発達障害」といわれる子どもたちにみられる様々な障害（あるいは症状）を、子ども自身すなわち「個」の視点ではなく「関係」の視点から捉えることによって何が見えてくるのか、自閉症を中心にして考えてみよう。

以上述べた視点から、筆者らが実践してきた「関係発達臨床」の基本的な考えを解説し、さらに具体的な自閉症の事例を提示して、その臨床経過から何が見えてくるかを示してみよう。

このような視点は何も「発達障害」領域に特有なものではなく、多様なこころの臨床に関わるわれわれが常日頃から心がけねばならないものだと思っている。

### 2. 発達障害とは何か

これまで、発達障害は、生得的な中枢神経の基礎障害 impairmentを有し、成長過程で障害（症状）disability/

disorderが発現し、生涯にわたってなんらかの障害handicapが持続するものとみなされてきた。発達障害における「障害」は「個」の中に閉じ込められるとともに、固定的なものとする障害観が形成されていった。

しかし、本来「発達障害」における「障害disability/disorder」とは、これまでの成長過程で形成されてきたものであって、けっして生得的に規定されたものではないはずである。現に、発達障害にみられる多様な状態像は生誕直後に顕在化するのではなく、乳児期後半から幼児期早期に明確になってくる。さらに、なんらかの介入によって障害（症状）とされていたものも変容を遂げていくものである。すなわち、人間の発達・成長は勿論のこと、その障害も生まれてから今日までの日々の対人交流の蓄積の中で形成されていくものだと考える必要があるのではないか。ヒトは関係の中で、つまりは対人交流の蓄積の中で始めて人間となっていくのであって、個体の自己完結的な営みではないのである。

### 3. こころの成り立ちについて

つぎに問題となるのは、心の成り立ちをどのように考えるかということである。素朴に考えてみてもわかることだが、乳児は自分の気持ちのありようを知的に理解することはむずかしい。原初の段階では喜怒哀楽といった気持ちの分化さえも満足にはできていない。しかし、生まれて間もなく、泣き方も次第に分化し、空腹な時と眠い時では泣き方にも違いが表れる。その段階で乳児自身は自分の気持ちをいまだ理解してはいない(だろう)。そこで養育者は乳児の気持ち、つまりは情動の動きを自らの身体で感じ取って相手をする。乳児が今なぜ泣いているのか、何が不快なのか、乳児の気持ちを感じ取りながら応じている。まるで養育者自身が乳児であるかのように、そこで感じ取った気持ち（乳児の気持ち）を投げ返ししながら相手をしている。成り込みと映し返し（ミラーリング）である。このような関わりの体験の蓄積によって子どもの情動の分化は促進されるとともに、子ども自身も自分の情動の動きの（文化的）意味に気付くようになる。このような対人交流を日々蓄積していく中で、心は次

第に形作られていくものであって、子どもの中で自己完結的に自生してくるような性質のものではない。関係を抜きに心の問題を考えていくことなど原理的に不可能である。

#### 4. なぜ自閉症児の心の動きを感じ取ることが難しいのか

心の成り立ちをこのように考えていくと、われわれがまずもって問題として取り上げる必要があるのは、なぜわれわれは自閉症の子どもたちの心（気持ち、情動）の動きを感じ取ることが難しいのかということである。そこにはどのような関係の問題が派生しているのかということである。もしもわれわれが彼らの心（気持ち、情動）の動きを感じ取りながら関わるができるならば、彼らの気持ちの分化も進み、彼らの心も次第に育まれていくのではないか。われわれに彼らの心（気持ち、情動）の動きを感じ取ることが難しくしているのは何か、その点を追及していくことが必要ではないのか。

#### 5. 関係欲求をめぐるアンビバレンスと情動の機能不全

自閉症の子どもたちとわれわれとの関係を困難にしているのは、子どもたちに認められる関係欲求をめぐるアンビバレンスである。このアンビバレンスのために、われわれとの関係に負の循環が生まれ、その結果様々な異常行動がもたらされる。そして、負の循環が断ち切られない限り、このアンビバレンスは増強の一途を辿っていく。

このアンビバレンスは心の原初のかたちともいえる快／不快の分化さえ困難にし、情動の機能不全をもたらす。両者間に情動が共振するという本来の情動的コミュニケーションの成立が困難になるのである。

われわれが子どもたちの情動（気持ち、心）の動きを感じ取ることが困難であるのは、このような理由によるのであって、子どもの側の要因（素質）か、われわれ養育者側の要因（環境）か、といった単純な二者択一の問題ではない。素質と環境が相互に複雑に影響し合った結果生まれるもの、まさに**関係の問題**なのである。

ここで示された関係の問題、つまりは**関係障害**に対してなんらかの支援の手だてを考え、負の循環を断ち切り、好循環をもたらすことができれば、関係は修復されていくことが期待される。このような支援のあり方をわれわれはこれまで「**関係発達支援**」と称してきた。

#### 6. 関係発達支援との中で起こる関係の変容過程

この支援の最大のポイントは、子どものアンビバレンスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の負の感情および負の関わりを減らすことである。つまりは、両者のあいだに生まれた負の循環を断ち切ることである。アンビバレンスを緩和する働きかけの中心は、それまでの養育者の過干渉的なあるいは一方的な対応をできるだけ控え、子どもの関心の向かうところを丁寧に受け止めることである。

この対応が功を奏すると、子どもの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの気持ちの動きを掴みやすくなる。子どもの気持ちが養育者に掴みやすくなることによって、養育者も子どもの気持ちを受け止めることが比較的容易になり、当初の関わりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれ始める。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになると、子どもは外界に対して好奇心を持ち始め、積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとのあいだで何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側にさまざまな表現意欲が湧いてくる。このような好ましい関係が生まれることによって初めて、子どもの本来の発達の道が切り開かれていくのである。

以上が関係発達支援によって期待される＜子ども－養育者＞の関係の変容過程の骨格であるが、この基本姿勢に基づいた支援を通して、自閉症の障碍とされるものがどう変わっていくのであろうか。さらには、子どもと養育者はどのように育っていくのであろうか。関係の変容過程とともに、具体的な事例を通して論じてみたいと思う。

#### 参考文献

- 小林隆児（1999）．自閉症の発達精神病理と治療．東京，岩崎学術出版社．
- 小林隆児（2000）．自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—．京都，ミネルヴァ書房．
- 小林隆児（2001）．自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—．東京，岩崎学術出版社．
- 小林隆児（2004）．自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界—．京都，ミネルヴァ書房．

小林隆児・鯨岡 峻 (2005). 自閉症の関係発達臨床. 東京, 日本評論社.

小林隆児 (2008). われわれは自閉症児の心を理解できているか. 教育と医学, 56(9); 854-862.

小林隆児 (2008). 自閉症のこころの問題にせまる. そだちの科学, 11, 2-9.

小林隆児 (2008). よくわかる自閉症—「関係発達」から

のアプローチ. 法研.

小林隆児・原田理歩 (2008). 自閉症とこころの臨床—行動の「障害」から行動による「表現」へ—, 岩崎学術出版社.

鯨岡 峻 (2005). 発達障害の概念とその支援のあり方を考える. 教育医学, 53, 1128-1136.